

金新郷土芸術賞に輝く受賞者の横顔

受賞者の横顔

〈上〉

六十一年度鉛新郷土芸術賞の受賞者が決まった。絵画部門は初期のストーブなど静物から半具象へとたゆみない制作へ打ち込む深谷栄樹さん、ピアノ部門はピアノ教師として指導するかたわら、地元に定着したコンサート活動を続ける桃井信子さん、箏曲部門は宮城流箏曲の古典を基調に三弦と洋楽との合奏など新しい分野へ挑む鈴木順子さんの三人に贈られる。十五日の贈呈式を前に、そのプロフィルを紹介する。

市内の画廊・丹青で、久しぶりに作品展を開く。九年ぶりの作品展とあって、早朝五時ごろに来月、9年ぶりに開催する計画である。大作四点を含め二十点ほどを展示する計画だが、「自分としては何か新しい毎日」。

深谷さんは十二月八日からろから出勤まで制作に没頭し、いものをつかみたいと願つて

北國の哀歎を基周

北國の

卷之三

静物から半具象に脱皮

の個展」と深谷さんはいう。

その一つの節目とも期すべき
事実であります。今三月

田原の回の賞を受ける
作品から脱皮を一と願うい

ま、大きな励ましと受け止め
る。

個展を前に制作に打ち込む
深谷さん

絵画

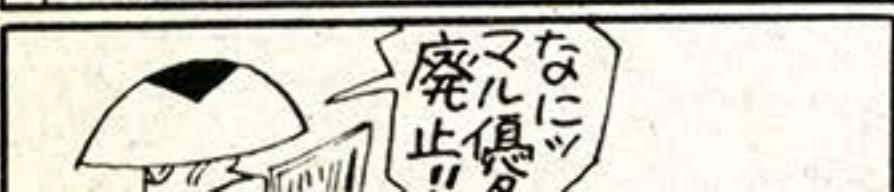
深谷榮樹

絵
画

(釧路町曙八の二)

アレハル君

木崎征夫



然をバックにして線路を走るのは快い。やはり本来の職場にもどりたい」と訴える。そんな国鉄マンが絵筆を握ったのは二十歳の頃。寮生活の中で、当時釧美展の役員を務めていた萩原勇雄さんのアトリエに通つて、デッサンなどに励んだ。

59年に寺島春雄賞うける

深谷さんが描くテーマは大半が静物—ストーブやドラマ缶、魚のカレイなどにこよな

浜に生きる者の喜怒哀楽を基調に制作していきたい」と深谷さんはスケッチを取るために浜へ足を運び続ける。

青を基調にした力強い画面作り。「道東に生まれ育ったので、やはり道東をモチーフにして、作品に取り組んでいきた

く愛着を感じた。釧美展に出きない。

基調